

往復書簡

今回は、梶谷氏（山梨県 ㈱ファーマーズ・リンク）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡3回目です。

拝啓 高木 勇樹 様

二月の大雪で雪国と化した当地も、3月に入り春の陽気を感じられるようになりました。固く凍り固まった雪も暖かい日差しで急速に溶け、当社のハウスで栽培中の小松菜も急激な成長を遂げております。

この間、高木様からの返信と併せ、読売新聞での連載を拝読させていただきました。高木様の官僚としての苦悩・葛藤と現在の活動に至る「想い」を少しだけ理解できたような気がします。弊職の短い人生経験からは想像もできない、国家を動かすという大業に携わられてきた高木様のご経験と今日の活動に、改めて敬服の念を抱きました。同時に、弊職が高木様の年齢になった時に、同じような想いで生きていられるよう、日々精進しなければと改め感じました。

高木様が官僚として農林行政に携わられていた時期は、現在の農政の基盤であり課題でもある農地法や輸入関税、農協、減反等といった難問が山積していたとのことですが、いずれも弊職がこの世に生を受け、社会に出る前のことで、リアルにイメージを持つことができないというのが正直な感想です。

唯一、弊職が小学生の頃、水稲農家であった両親が、個人を相手にお米の販売を始めたことを思い出しました。始めは京都市外の田舎まで買いに来る一部のお客さん相手でしたが、高校に上がる頃には、京都市に直売所を設け、市内全域に配達しておりました。大学生の頃には、弊職も学校が終わると、南へ北へ配達をして手伝いをしたものです。このような一般農家の経営転換のきっかけ

となる農政の変化点に、高木様は一人の官僚として関わっていらつしやったということに改めて知りました。

いま、次代の日本農業を担う我々世代は、過去を知りません。目の前にある矛盾や本質性に欠ける現実の中で、現場で歯を食いしばりながら、その現実と闘っているのです。一人でも多くの若手農業者が、過去と現在を理解した上で、夢と希望を持って農業に携われるように、同じ「珍種」として、更なるご指導をいただきたいと考えております。

また、農業、農政のあるべき姿について、高木様のお考えを聞かせていただければ幸いです。

敬具

平成二十六年三月吉日

梶谷 よしみ （かじたに よしみ）

一九七九年 京都府生まれ
二〇〇三年 立命館大学法学部卒業
二〇一〇年四月 豊田通商㈱入社
二〇一二年 実家に戻り、㈱京都ファーム支援
同年十一月 山梨県(㈱イズミ農園)に就職・就農
農場および集出荷施設管理
㈱ファーマーズ・リンクに社名変更



拝復 梶谷 よしみ様

二月の大雪は恐らく関東各県ではほとんど想定外だったのではないでしょうか。

暑さ寒さも彼岸までと言いますが、東京のソメイヨシノの開花宣言は三月二十五日。桜花散り敷く中で入学式を迎える学校が多いのではないのでしょうか。

私は常々思うのです。ひとりの人間が生きられる時間、経験できる時代は限られています。当然経験する内容も、その受けとめ方も千差万別です。

まして梶谷さんと私のように親子以上の年代差があれば尚更です。加えてどのような仕事であれ、仕事をする環境は、グローバル化の進展、政治・経済それぞれのステークホルダーの利害関係の複雑化などの中で、常に課題をかかえながらも急速に変化し続けています。

一方変化にブレーキをかける既得権益勢力の理解を得るために要するエネルギーも、選挙を通じて政権の権力基盤（正統性）の強弱が決まる仕組みである民主国家では相当のものであります。

「時代の証言者」で伝えたかった事のひとつです

が、国民の^{もと}需めをとらえた変化、（私流に言えば「大義」のある変化）は紆余曲折はあっても必ず実現します。

お手紙の中のお米の直売の成功は正に「大義のある変化」の実現です。そのときの経営のものさしは「大義」に合致したのです。

過去と現在の先にある未来。ここでの「大義」を梶谷さんのものさし（感性）私流に定義すれば創造力、想像力、先見性、判断・決断力、直観力などの総合力）がどうとらえるか。

目の前にある矛盾や本質性に欠ける現実に私も何

度も直面しましたし、今も直面しています。

でもあきらめません。私一人は微力ですが、これまでの経験・蓄積を、生涯現役の気概を持って、捨て石になつて、「珍種」増加と支援のため発信し、伝え続けます。

随分と突き放した、冷たい回答と怒られるのを覚悟で申せば、恐らく農業・農村のあるべき姿は、国や他人に頼むものでなく、自らのものさし（感性）が目指す「大義」によって自ら描いていくものだと思います。

何年か後またこのような機会をもちたいと思います。

平成二十六年四月吉日

敬具

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
二〇〇二年 農林中金総合研究所理事長
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

